

戦後国語教科書における〈原爆文学〉

— 中学校用教科書をめぐって —

堀 本 嘉 子

はじめに

原爆文学研究会に初めて足を踏み入れてから八年になる。二〇一一年三月、大学四年生だった私は大学院への進学を決めていた。卒業論文では谷崎潤一郎が連載した『女人神聖』という小説について登場人物が抱える性自認や性指向の葛藤と表象と雑誌『婦人公論』との関連について論じた。修士課程では継続して婦人公論について勉強を続けようと思っていたのだが、東日本大震災以後、長崎原爆の三世であつても自身が東京で生まれ育つたことによつて抱えていた葛藤を無視できなくなつてしまった。修士論文で国語教科書と原爆文学について書くこうとするうちに川口隆行『原爆文学という問題領域』に出会い、インターネットの検索エンジンで原爆文学研究会のホームページにたどり着いた。修士論文を提出した後、二〇一三年四月二十七・二十八日に福島で開催された研究会に出席したのが初めての参加となつた。

奨学金を借りて複数のアルバイトを掛け持ちしながら学部を卒

業、その後も大学院生と学校非常勤講師を続けることになつたのは、ひとえに原爆文学研究会との出会いが大きい。お金も学もなかつた私が遠く離れた研究会の開催地にできる限り向かおうと思えたのも、原爆研究会が大学人だけでない人に開かれていたからだ（後になつて、それはそのように見えただけで実はとても学術的な会であるとも気づかされるのだが、気づかないまま参加し続けたことは私が私であり続けるために必要なことだった）。おかげで東京にいただけでは見えなかつた問題領域について博士後期課程を満期退学した後も向き合い続けることができた。東京や神奈川の私立高校の非常勤講師と塾講師という二足の草鞋生活を経て、現在は東京都内にある公立中学校で教諭として働いている。

私が大学を卒業して原爆文学研究会に参加するようになったこの十年の間、特に二〇一八年から国語教育に関わる者にとつて激動の時間を経験することになった。それは乱暴にまとめると次のような経緯である。文部科学省は「戦後最大の改革」とも言われる大掛かりな変革を企図したがこれに対する問題提起の声が各現場関係

者から噴出。国語科の中でも紅野謙介『国語教育の危機 大学入
学共通テストと新学習指導要領』の刊行が大きな話題を呼んだ。
各地で研究会やシンポジウムが行われ、二〇一九年は雑誌に高校
国語関係の特集が掲載されるなど大きな動きが見られ世間的にも
「国語」をめぐる議論が注目を集めることとなった。新型コロナウイルス
の感染拡大とともに、対面の集会は難しくなったが、こうし
た世論の動きも影響して大学入試改革においては英語民間試験導
入の見送りや国語・数学の記述式問題導入の見送りが発表された。
しかし新学習指導要領に基づいて二〇二一年に発表された教科書
検定の結果は、またも関係者に疑義を唱えさせることになっており、
今後も「新しい国語」をめぐる議論が続くであろう。

この間、小・中学校では新しい学習指導要領に基づく教科書が
編集され小学校では二〇二〇年度から、中学校では二〇二一年度
から新しい国語教科書が使用されている。中学校の国語教科書で戦
争や原爆に関する教材の掲載動向や編集方針、求められる指導が
どのような言葉で教科書や指導書の中に書き残されているのか。現
行の教科書から過去の掲載教材をめぐる言説を辿ることによってその変
化と課題を紐解きたい。

一、新しい中学校教科書と戦争文学・原爆文学の掲載状況

日本では戦後から約十年ごとに学習指導要領の改訂が行われ^①、
その都度、新しい教科書が編纂されてきた^②。検定制度をとってい
ることからも、今何を読ませるべきか、何を教えるべきか、教科書
はその時々々の教育の世相を映し出しているといっても良いだろう。

国語科においては教科書に掲載されたテキストを出発点として授業
が展開される^③ことから何が掲載され、どのように教えられよう
としているのかを考えることは今を生きる自分自身とこれからを生
きる子どもたちのことばの教育について考えるきっかけとなるだろ
う。戦争文学・原爆文学の掲載や指導については「平和教育」とい
うカテゴリーが確立しており教壇に立つ教師に限らない実践や蓄積
がなされてきた。

二〇二一年度における中学校用検定教科書の発行者は前回（二
〇一六年度）五社であったが、今回このうち学校図書は検定申請を
取り下げ、東京書籍・三省堂・教育出版・光村図書の四社となっ
た。現行の教科書で採択されている戦争・原爆関連の教材を抽出
すると次のようになる（うち、原爆を扱っている文章には※印を付した）。

向田邦子「字のない葉書」は複数の教科書会社で教材または読
書教材としてこれまでも採用されているが、他教材についてはこれ
までの掲載状況の変遷を追うと各社それぞれの試行錯誤の痕跡が

光村図書	一年	大人になれなかつ た弟たちに：	字のない葉書	二年	壁に残された伝 言（※）	握手	三年	挨拶―原爆の写 真によせて（※）
教育出版		ベンチ	夏 の葬列			薔 薇のボタン （※）		
三省堂		字のない葉書						
東京書籍	碑（※）	字のない葉書				生 ましめんかな （※）		

見てとれる。また二〇二一年度の教科書に新たに加わった特徴として防災関連のテキストが掲載されるようになったことが挙げられるだろう。二〇二一年の東日本大震災をはじめとするこの十年の防災意識の高まりから、東日本大震災を振り返るコラムや、防災の研究に尽力してきた随筆などが掲載されている⁵⁾。

本年度から中学校で使用されている新しい教科書でも「原爆文学」が国語教科書の定番としてその領域を継続したことは国語科が変わることを求められる中で「原爆文学」によるいわゆる「平和教育」が変わらないものとして、その指導内容が維持されているのか。従来とは異なる教え方をしようとする方向性が見られるのか。これまでに採録された教材の変遷や指導書等の言説から確認してみたい。

二、虚構の力と無名の被爆者による証言と記録への期待

過去に中学校用教科書に掲載された「原爆文学」といえばまず原民喜や峠三吉、栗原貞子の詩、井伏鱒二「黒い雨」、林京子「友よ」などが思い浮かぶ。実際のところ中学校用国語教科書はこれまでに原爆に関する詩以外にも紙幅をとる小説やエッセイを掲載してきた。しかし、現代文も古典も文法もあわせて国語の授業の中で教える中学校用教科書では原爆に関するテキストに費やせる紙幅も時間にも限界があるのか各社様々な変遷を辿つていわゆる文学の掲載が減少している傾向にある。

教科書の掲載作品は多くの者の目に留まるため、批判を受ける機会が多い。井伏鱒二「黒い雨」論争は国語教科書における「黒い雨」掲載の継続を阻んだ。現行教科書でも東京書籍が中学校三年生用

の教科書「新しい国語3」で栗原貞子の詩「生ましめんかな」を掲載し⁶⁾、光村図書も「国語3」に石垣りんの詩「挨拶―原爆の写真によせて」を継続して掲載しているが、これら詩作品が残っているのは詩という形式のもつ懐の広さ故かもしれない。

たとえば井伏鱒二「黒い雨」は一九七三年に東京書籍と筑摩書房版の高等学校教科書に掲載された後、一九七五年には学校図書が中学校用の教科書に採録。八〇年代半ばになると三省堂（一九八五年）、第一学習社（一九八六年）と採録数を増やしていくこととなった。筑摩書房は掲載当初の指導書で「黒い雨」の教材価値について「戦争と個人といった対立を通して、平和な日常にこそ生きようとする庶民的願望を読み取ることになるだろう。反戦平和、庶民の姿に迫ることも、高校国語の課題の一つである。検定教科書といつてもこうした姿勢を貫いて、教育を受ける側の利益を守ることが期待されているのである。」という説明を掲載⁷⁾。それまでの「原爆文学」は事実との乖離が激しく教材化に至らなかつたとし、「黒い雨」の教材化が〈ことばが現実の想像を超えた悲惨にとつて、どのような有効性を持ち得るのか、一つの優れた解答を、ここに見出すことができる〉ものであると説明を加えている。そのうえで、教材「黒い雨」の主題は〈核戦争廃絶という国民の希願に連帯〉するものであり、同時に〈ことばの有効性に眼を開く〉ものであるとしているのである。「黒い雨」が〈日本人の原爆体験を最も細密に描いた名作として声価の定まったもの〉と認知され、新たな付加価値が模索されていた様子が、教材として採録され始めた頃の指導書には見られなかつた「反戦平和」「核戦争廃絶」という言葉の並びからも感じ取ることができる。

学校図書は中学校用国語教科書で「黒い雨」を掲載していた発行者である。「黒い雨」は二〇一六年学校図書が発行した「中学校国語3」にも掲載されていたが、令和三年度使用開始の国語教科書からは検定申請を取り下げている。これにより、今後は井伏鱒二「黒い雨」を中学校用国語教科書で読む機会はなくなっている。

「黒い雨」が盗作なのではないかといういわゆる『「黒い雨」論争』の後には他の教材に変わっていった経緯もあり、紙幅に制限のある教科書から「黒い雨」が姿を消すのは時間の問題だったのかもしれない。しかし、中野和典が述べているように作家が生み出した虚構作品にこそ読み直すべき物語になる場合があることは忘れてはならないだろう⁹⁾。中野は「黒い雨」のもとになった重松や岩竹の手記が優れた証言であることに疑いはないとしつつ、筑摩書房版『重松日記』がこれから「黒い雨」以上に読まれるようになるとは考えにくいと見解を示している。それは井伏鱒二という作家がただ被爆者の証言や記録を引用したのではなく、読み直すべきものとする物語を構成したこと、原資料にはない「黒い雨」の生産性を無視して盗作と見なすのは小説の評価として妥当なものとはいえないという虚構作品こそがもつ力について言及すると同時に、井伏という著名作家が書いた「黒い雨」が「原爆文学の正典」として長く読み継がれているのに対し、無名の被爆者による証言や記録はほとんど顧みられることがないという圧倒的な差をどのように考えればいいのかという問いを「黒い雨」論争が投げかけていることを指摘している。国語教科書もその用途から著名作家が書いた作品が掲載され、原爆文学もその例に漏れない。しかし、かつて教育出版が中学校用教科書に「カボチャの日」という生徒作品(作文)を掲載して無名の被

爆者による証言や記録を顧みようとするような章立てに挑戦していることは記憶に留めておきたい。

教育出版は一九七八年「中学国語3」で(第八章 平和への願い)に原民喜「永遠のみどり」と並んで作者無記名(本文文末に「生徒作品」とし記され、出典は『戦火に生きた父母たち』によったと記されている)の「カボチャの日」、『カボチャの日』について書く」というエッセイ、続いて広島県生まれの児童文学者・山口勇子(一九一六―)による書き下ろし「アンネの生涯」を掲載している。同出版社の教科書は一九六九年から「アンネの日記」と「アンネの生涯」が掲載しており、しばらくユダヤ人迫害や差別と原爆を扱ったテキストを「平和」に関する章立てでまとめる構成を取っていた。「カボチャの日」は中学生である作者が母から聞いた原爆体験の話をもとにして書いた作文として紹介され、「人から聞いた話を、よくわかるように工夫して書こう。」という学習活動に繋ぐように配置されている。掲載当初は「生徒作品」として掲載されていた本作は一九八一年版では内田順子と作者名が明らかにされている。

この後、一九八一年から林京子の「友よ」が「中学国語2」に掲載され、著名作家が書いたテキストが原爆文学を用いた教材の姿を担っていく形を取るようになり、「カボチャの日」は次の改訂で姿を消している。生徒作品が検定教科書に掲載され教材になる例は当時珍しくなく、生活作文の延長のような文章が一章分を占める構成をとった教科書も存在していた。「カボチャの日」はこのような生徒作品が強化化する当時の流れにのって目の目を見たようなのであるが、無名の被爆者による証言や記録を生徒作品という力を借りて教材とした経緯には虚構にないリアルを見出そうとした痕が見

て取れるようでもある。ある特定の作者ではなく無数の不特定の人の声をどうしたら取り扱えるかを教科書が教科書だからこそ模索していたのかもしれない。

三、平和教育運動の学習材として

「原爆文学」は特に先にあげた「黒い雨」が採録数を増やしていた八〇年代の指導書では主題を〈核戦争廃絶という国民の希願に連帯〉するものと捉え、運動と繋いでいくような方向づけがされていた。日教組教文部長であった今村彰は国際児童年である一九七九年を契機とした平和教育運動の飛躍的發展を願い「教育評論」八月号に平和教育運動のあゆみを振り返る論考を寄稿している^④。

この間、平和教育運動は、国民的な平和運動の發展のうねりのなかで、その内容を深め、すそ野をひろげてきたということができる。すなわち、一九五七年、「勤評は戦争への一里塚」の合言葉のもとに全国各地で地域共闘を發展させた勤評反対闘争、原水爆禁止・基地反対等、すべての平和・民主勢力を総結集した六〇年の安保反対闘争、沖縄の祖国復帰闘争と固く結合し、持続的に發展をみた六十五年以降のベトナム反戦のたたかい等は、平和教育運動前進の大きな布石となった。日教組が第二十九次教研推進の「平和と民族の教育」分野の研究課題として提起した要旨は以下の五つである。

①各地域でのたたかいと実践を通じて政治と教育の反動化の実態を具体的にとらえ、政治と教育・文化の両面でのたたかい、創造の展望を切り開こう。

②青少年の陥っている意識・行動様式のゆがみと、それを反動勢力がいかに利用しているのかをつかみ、青少年に生きる意欲・人権感覚・学ぶ意志をいかにとり戻させるかの具体的内容・方法を追求しよう。

③ひろしま・ながさきの学習を通じ、とくに中等教育段階では核兵器廃絶と全面軍縮という、人類史的な課題の担い手として求められる基礎知識、連帯と団結の精神を育てよう。

④地域の父母・住民とともに、地域の民衆の反戦平和と人権のたたかいの歴史、戦争体験の発掘、記録と保存、学習を意欲的にすすめよう。

⑤教科・教科外での平和教育実践を多面的にすすめ、とくに平和のための日本人民と諸国人民の連帯の歴史について学習を深め、それぞれの学校段階に応じた教育課程の自主編成をおしすすめよう。

「生きる力」は二〇〇八年に改訂された学習指導要領で目標の一つとして打ち出され、現行の新学習指導要領でも使われている言葉である。二〇二一年現在も文部科学省HPの学習指導要領「生きる力」トップには「生きる力、学びのその先へ」の文言が見て取れる。「生きる力」は抽象的な言葉ではあるが、ここでは一九七九年時点で現場を牽引する教員が「生きる力」と平和教育運動とを強く結びつけて「沖縄」「ベトナム」「ひろしま・ながさき」を原点にすえた特別授業がしだいにひろがりを見せていくよう自覚的に働いていたことを確認しておきたい。「原爆文学」が教材として国語教科書に登録された当時は教科書の外側で起こっていた運動と連動してより重厚な指導が目指されようとしていたのである。

四、扱われ方の変化

一般社団法人教科書協会によれば教科書のページ数は増加し続けているが、かつての教科書から現行の教科書までを実際に手にとって眺めてみると中学校用国語教科書が改訂するたびに内容は平易に、「軽く」なっているように感じるといふ声がある⁹⁰。それは恐らく各テキストそのものの強度というよりも、かつて目指されていた「平和教育運動」と連動するように採録された「原爆文学」と比べて見たときに感じる「軽さ」なのかもしれない。

同じ本文テキストが掲載されていても「重く」取り扱われていたものが「軽く」なっているように見える場合もある。たとえば一九八四年から東京書籍に採録されている「碑」は二〇二一年度の教科書でも継続している息の長い教材である。冒頭のリード文に「これは広島県立広島第二中学校の一年生三二二人と四人の先生が原爆で全滅した過程を、追跡調査して作ったドキュメンタリーのシナリオで、二十五回忌にあたる昭和四十四年の秋に全国に放送された。制作に当たって集められた遺族の手記や資料は『広島二中生徒の記録』として、現在、原爆資料館に保存されている。」とあり、本文が事実在即したテキストであることが示されている。『碑』がはじめて採録された当時の指導書に目を通すと「話題の新鮮さ、思考力、読解力の養えるもの、表現との関連などを考えた。『碑』は戦争と平和を考えさせる教材として特に選んだ。」と明記されており、熱い思いをもって迎え入れられていたことが紙面からうかがえる⁹¹。

「碑」は初掲載当時から学習活動として「原爆投下直後の爆心地の状況を書いた文章の内容を読み取り、その事実の持つ厳しさや重さについて考え、読書の意味を知る」「読後感を話したり書いたりする。」などがあげられ、読書や調べ学習の窓口としての教材価値を築こうとする様子が見て取れる。二〇〇二年の指導事例編では「碑」の朗読劇の実践例が挙げられている。しかし、二〇一二年には読書の一環として「碑」が取り上げられ、紹介カードを作成することに主眼が置かれている。「碑」において扱われる戦争と平和という題材はあくまで数多くあるテーマの一つであつて、紹介カードではそれ以外のテーマを扱った書籍を紹介しても良いことになっている点も気になる変化と言えるだろう。配当時間も掲載当初一九八四年は五時間だったものが、二〇一二年には三時間になっているのも従来よりも本教材に対する意識が「軽く」なったことを感じさせる。

三省堂は一九七五年「現代の国語2」の「アンネの日記」掲載時から戦争に関する教材は記録することと結びついた教材として捉え学習活動を設定している。特に一九七五年版は第一章で「自己を見つめる 討議・発表をする」の項目でアンネ・フランクを取り上げて第二次世界大戦に関わる問題について国語の時間でも考えようとする萌芽を見せている。一九七八年には一章から八章へ移動して(章タイトル「自己を見つめて」、一九八一年には「現代の国語3」の第二章「人類と文化」の中に峠三吉「仮緋帯所にて」、野坂昭如「凧になったお母さん」が掲載された。しばらく「仮緋帯所にて」と「凧になったお母さん」がしばらく続くが、一九九三年には「凧になったお母さん」が消え、一九九七年には峠の掲載もなくなつて

いる。代わりにこの年は「現代の国語2」にこの教科書のために林京子が書き下ろしたとされる「戦争と平和を思う」が採録されている。⁽¹⁾これは第五章「国際化の中で」に配置され、教科書巻頭のグラビアには関連画像として長崎の平和祈念像の写真が掲載されている。林は本文中でついでこの前のように思っていた戦争から、半世紀が過ぎたことから戦争の現実と犠牲者を忘れた「平和ぼけ」という言葉に対してげくと表現できるほど、気楽に得られた半世紀の平和ではなかったことを述べ、戦後に慣れた「私たち」の言葉の在り方を危惧する。⁽²⁾それまでの三省堂の中学校用教科書の目次を辿っていくと、峠三吉「仮包帯所にて」↓立原えりか「アイスキャンディー売り」↓林京子「戦争と平和を思う」↓井上恭介「壁に残された伝言」と掲載作品が変化している。林の「戦争と平和を思う」が本文から姿を消した二〇〇二年では代わりに妹尾河童「『少年H』で伝えたかったこと」が掲載され、中学三年生用の教科書本文に峠三吉「仮包帯所にて」が復活している。しかし二〇〇六年に中学二年生用の教科書には井上恭介「壁に残された伝言」が迎えられた。これは北海道出身の放送ディレクターが東京からの転勤で広島に赴任した際に翌年の八月六日の原爆の日に放送する特別番組を作るために「あの日」を取材する中で出会った「伝言」について綴ったエッセイである。このタイミングで中学三年生の教科書に掲載されていた峠三吉の詩は荒巻裕「平和を築く——カンボジア難民の取材から」に取って変わられて姿を消すこととなる。

光村図書は三省堂と同じく「アンネの日記」を採録するところから第二次世界大戦関連の教材採録が始まっている。その後、翻訳小説「一切れのパン」を経て、嵯峨信之の詩「ヒロシマ神話」↓原

民喜「夏の花」↓石垣りんの詩「挨拶——原爆の写真によせて」といった掲載の変遷を辿った。「ヒロシマ神話」が繰り返し採録されたことや現行の教科書でも石垣りん「挨拶」が残っていることからも光村では広島原爆の記憶を詩の力で留めようとする姿勢が見て取れる。

川口隆行が指摘しているように「原爆文学」は一般の戦争教材同様、国語教科書の定番としてその立ち位置を確立してきた。「教科書」という公的メディア、公教育制度への原爆文学の登録は、この時期にトラウマ記憶から物語記憶への変換、ある種の社会的合意形成が行われたことを示唆し、国語教科書への採録と物語記憶への変換とある種の社会的合意形成の流れは忘却されるを生み出した。⁽³⁾

栗原貞子の詩「ヒロシマというとき」が「被爆者」被爆者という図式を前提として定式化された被爆者観を被爆者自身が打ち破ろうとした実践⁽⁴⁾であつても、今でも東京書籍の教科書に掲載されるのが栗原の「生ましめんな」であり、光村図書の教科書に掲載されるのが石垣の「挨拶」であるところに中学校用国語教科書が抱える限界あるいは検定教科書という言葉空間の傾向が見て取れる。「ヒロシマというとき」を読めば「わたしたちの汚れた手」の意味するところを読み取る際に加害と侵略の歴史について触れねばならないが、「生ましめんな」を読ませることは原爆の悲惨さとそこに垣間見える希望を読み取るだけで済んでしまう可能性が出てくる。教科書という公的メディアの外側へ教室を開けるかは授業者が忘却された者に視線を送り続け、その様相を生徒に見せていけるかが鍵となるだろう。

五、文学教育から「わかる」学習材へ 誘惑と異動

一九七三年、筑摩書房は「現代国語Ⅰ」教師用指導書の中で井伏鱒二「黒い雨」を次のように紹介している。

「黒い雨」は、広島に原爆が投下され、それに伴う敗戦を迎えた時代の激動の中で、おびえ悩まされる広島市の無辜の庶民に材を得た作品である。原爆にかかわった一連の出来事は日本人にとって忘れることのできない国民的経験であるとともに、その衝撃から立ち上がって戦後の日本の生き方を見定めようとしたという点でも、常に思い返されなければならない歴史の原点の一つと言えるであろう。

文学を解釈する教育方法論は国語教科書の中で原爆を扱ったテキストが「原爆文学」として教科書に採録される中でも援用されてきた。中学校用国語教科書はかつてのA5版から大判化が進みB5版全ページフルカラーとなったが、A5版の教科書が主流だった頃、巻頭グラビアに掲載される写真は限られる。かつてはこの限られたグラビアページには文豪の近影や生家の写真が採用され、教科書本文では作家の想像力によって形成された表現や情緒を読み取り、理解することが国語科の目標として取り上げられた⁽⁴⁾。一個人である作家の人と経歴を追うこともテキストの読みを深めていたであろうことが教科書の構成からうかがえる。そのグラビアページに広島の平和記念公園や長崎の平和祈念像が掲載されることが違和感なく掲載されるようになったことは、やはり原爆に関するテキストの採録に際して編集者側が重い意味をもたせようとしていたためだろ

う。たとえば、教育出版は林京子の「友よ」を掲載した際、対応する指導書でその教材価値を次のようにまとめている⁽⁵⁾。

作者、林京子は、自ら長崎で被爆した体験を持つ。芥川賞受賞『祭りの場』はもちろん、『友よ』を含む短編集『ギヤマン ビードロ』も、一九四五年八月九日の長崎とのかかわりをもつ作品である。八月九日を作品の主題とし戦後四十年以上経た今日まで、この問題を世に問うところに、この作品の特異性があるといえよう。被爆という一瞬のできごとによって、肉体と精神に大きく深い傷を負わされて生きる人々の、魂の問題を提示しているのである。

この章では「原爆」を扱ったテキストを教材として扱う際の注意点として①平和への願いの問題、②虚構性の問題、③表現の特徴の三つの視点に立つて「友よ」の教材価値について考察がされている。特に②については「このように、作者は、体験事実を選択し、また虚構の方法を織りまぜて、被爆という人類の最大の悲劇を作品化しているわけである。」とあり虚構の方法が織りまぜられていることが歓迎され教室での関わりが提案されている。これに対して、現行の教科書に掲載されている梯久美子「薔薇のボタン」は虚構から得るものとは異なる回路で戦争や被爆という体験を生徒に近づけようとする試みがとられている。

「薔薇のボタン」は広島市の被爆者の遺品を撮影している写真家・石内都との出会いとその作品について綴られたエッセイである。二〇〇八年に刊行された石内の写真集『ひろしま』に収録されている遺品のひとつは衣服で、若い女性のものが多い。梯は焼け焦げた衣服に美しさを見出す。「こんなにおしゃれな服を、当時の広島

女性たちが着ていた」と驚き、「写真そのものが美しかったこと」にも驚く。梯にとって石内の「美しく撮る」という明確な意志が感じられた写真は残酷な歴史を物語る陰影を消してしまふ「タブー破り」に思えたからだ。しかし、石内の「だってあの服たちは、女の子たちが着ていたときはもっともときれいだっただよ。それをきれいに撮ってなげいけないの。」という言葉から自身が戦争の遺品を、歴史資料として、あるいは自分がものを書くときの資料としてしか見ていなかったことに気づかされる。後日、石内の広島平和祈念資料館での撮影に立ち合うことになった梯含む女性達が被写体となるポロポロになったブラウスに薔薇のボタンを見つけてほっとしたように話し始める場面が描かれる。

布の塊を見ていた女たちは、薔薇のボタンが現れたとたん、ほっとしたように話し始めた。「見て、こんなに鮮やかな赤。」「かわいいね。」「私もこんな飾りボタンの服、持ってた。小さい頃に。」「あ、私も。」色あせて縮こまった布の塊は、戦争を知らない世代が抱く戦争のイメージに似ていた。理解できない、恐ろしいもの。簡単に触れたり語ったりしてはいけないもの。あまりに遠くて、共感の余地のないもの——。けれども、思いがけず赤いボタンが見えたとき、その場にいた誰もが、突然回路が繋がったように、理解し、共感し、何かを語りたくなった。たった数個のボタンによって、これを着ていた女性を身近に感じ、その時代の気配を感じることができたのである。(梯久美子「薔薇のボタン」より)

戦争を知らない世代が非体験によって抱く疎外感が薔薇のボタンの発見により解消される場面は原爆に興味をもってこなかった(あ

るいはもてなかつた)者を救うことがあるかもしれない。しかし、教科書に掲載された「薔薇のボタン」の学習目標は「読書への招待①」として掲載されているためか、「目的に応じて本や文章などを読み、知識を広げたり、自分の考えを深めたりする。」とう柔軟なものになっている。作者の一体験談が語られる本文は学習目標である目的に応じた本や文章などを読むきつかけとなる「情報」に過ぎず、テキストそのものを深く読み取る必要が必ずしもなくなっている。ともするとこの学習目標の設定の仕方はここで掲載されるテキストが広島原爆に関わるものであることが必然ではないことを自明することにもなりかねないのではないか。もちろん、ここで従来のように広島・長崎に関連する書籍を手にとらせ、考えを深めたり議論に発展させることも可能ではあるが文章を読んだ感想を述べ合うだけの活動になってしまふ懸念も十分にあり得るだろう。また、先にあげたように被爆者である少女たちの被爆前を想像することをきつかけに「わかる」という感覚をもつ女たちが登場する「薔薇のボタン」は、たとえば林の「友よ」を読解する学習体験とは一線を画す働きかけを生徒に与えるのではないかということを描き添えておきたい。

自分とは縁遠いと思っていた広島島の出来事が少女たちの遺品であるブラウスに残された薔薇のボタンによって被爆前の少女たちの生活に思いを馳せ、そこにある遺品の所有者が「一気に自分たちに近いものだと女たちが共感をもつ様は、他人の体験であったヒロシマを他人事としてではなく自分の問題として受け止め「わかることができる」易しい回路として提示されている。それ自体は戦後を生きてる者が戦争を理解する一つの選択肢としては良いのかもしれない。

しかし、国語教科書の指導変遷を辿っていったとき、梯の「薔薇のボタン」は扱ひ方によつてはかつて林の「空罐」や「友よ」で示された被爆体験に向き合う際に否応なく直面するジレンマ、体験を継承し次世代に受け渡すことの可能性と困難さ⁶⁾から解放されるという誘惑がありはしないだろうか。

教育出版の中学校用国語教科書に掲載された「原爆文学」はこれまで、生徒作品「カボチャの日」↓林京子「友よ」↓栗原貞子「生ましめんかな」↓原民喜「原爆小景」↓梯久美子「薔薇のボタン」と変遷を辿つてきているが、「薔薇のボタン」にはこれまでに採録されていたテキストで導き出されていた葛藤とは異なり、「わかる」という安堵感を容易く手に入れる誘惑が見え隠れしているのである。薔薇のボタンを見つげる前に「理解できない、恐ろしいもの。簡単に触れたり語つたりしてはいけないもの。あまりに遠くて、共感の余地のないもの」という感覚が被爆前の衣服の持ち主の姿を想像することで払拭されてしまつて良いのかという問題が残る。

先にあげた日教組の平和教育運動のあゆみからもわかるように、国語教科書は時に運動と強い結びつきをもつてその運動をより強固なものにしていく働きを発揮してきた。「黒い雨」や「夏の花」が掲載された当初は「原爆文学」を「文学」として評価する姿勢が示されたものの、やがてそれは原爆を扱つたテキストを起点とした調べ学習や読書活動に繋げる言語学習教材として変容してきている。中学校用教科書では「黒い雨」を掲載していた学校図書が二〇二一年度から姿を消し、残つた四社は学習指導要領の方針にตอบสนองするようにして採録する散文を第三者から原爆を見たシナリオやエッセイにして「読む力」や「聞く力」「書く力」を育てる学習

材としての位置を確保させているのは「原爆文学」が中学校用国語教科書に残るために必要な手続きだったのかも知れない。

しかし、これら「わかる」ための「情報」として配置されかねないテキストはかつて文学教育的手法から得ようとしていた学びを与えるのか。広島・長崎という本来は別個の出来事を一つの歴史情報としてヒロシマ・ナガサキとして処理して「わかつたつもり」の読みに終始してしまう構成と展開になつてしまつてはいないか。国語教科書という言説空間そのものが変革を迫られる中で、「原爆」をめぐつて取り上げられるテキストや指導書の言説も従来とは毛色が異なつてきている現実を教壇に立つ者は今一度考えながら意識的に指導にあたる必要があるだろう。

六、戦後を抱えるという選択

二〇二〇年から学校現場では新型コロナウイルスの感染拡大により従来にならぬ授業実践や対応が求められ続けた。世界的な感染症の流行は私達の生活様式を変え、子供達の学習のあり方をも急速に変えようとしているかのように見える。文部科学省が提示したGIGAスクール構想から二〇二二年に予定されていた公立学校のタブレット配布は感染症の流行とともに二〇二〇年度に前倒して行われ、遅々として進まないとされていた学校のICT化が急速に進められた。この動きの背景で新学習指導要領と新教科書の使用が始まつている。二〇一七年三月に小・中学校の学習指導要領の改訂が告示され、二〇一八年三月には高等学校の改訂版が告示された。「主体的・対話的で深い学び」の強調とプログラミング教育の充実が図

られる中、小学校では二〇二〇年度、中学校では二〇二一年度より新しい教科書の使用が開始されている。新しい国語教科書については特に大学入試改革や科目編成が大きく変わる高等学校の教科書をめぐって様々な議論が起ってきたが、そこで問題となつたいくつかの点は本年度より使用されている中学校用国語教科書でも起つていると感じている。

紅野謙介は「東亜共栄圏」という言葉が、当時は言葉だけを見るなら輝かしいユーロトピアを意味していたが、その言葉を生きたものにする文脈と実践が歴史的事実には行われず実現の方法とプロセスにおいて暴力的なディストピアに転じてしまったことを示し、「大入学共通テスト」や新たな「学習指導要領」にもそういった類の危険性が見られると危惧した。また、この改革のなかで「国語」に求められている共通点がいくつかあるとし、小学校や中学校の国語教科書ですでに徹底されていた共通点として、①実用的な文章の重視、②複数の資料（文章、図表、グラフ、写真など）の利用、③架空の対話形式の文章を挙げている⁽¹⁸⁾。

中学校用国語教科書を確認していくと、特に二〇〇〇年代以降の教科書に「実用的」な文章や資料の読み取りの項目が配置されていく様子が見て取れる。原爆文学においても「文学的」なテクストが採録されていた頃からその性質上、記録することの問題とセットで学習の手引きが書かれることが多かったのであるが、まだテクストそのものから登場人物の感情の機微を読み取ったり表現を解釈したりする余地が残されていた。しかし、現行の教科書を並べてみると読書活動や話し合い活動の起点となる「情報」としてテクストが配置され処理される向きが強まったように見える。「碑」は採

録当初の思惑から少し離れて学習材としての性質をより強固に示すようになってはいないか。梯久美子「薔薇のボタン」は遺品のもつ背景を自身に引き寄せる内容によつて「わかつてしまう」ことの「軽さ」を誘発してはいないか。もちろん、教壇に立つ教師自身が教科書に収められたテクストを解き放ち、情報処理で終わらない指導をすることも可能であるはずだ。しかし、現行の中学校用教科書を見たときに、かつての文学や歴史性の中から体系的なことの教育を実現していこうとする流れが分断され消えようとしているのではないかと一抹の不安を覚えるのも確かなのである。

新学習指導要領総則には指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項として、学校図書館を計画的に利用しその機能を活用を図り、児童・生徒の主体的、意欲的な学習活動や読書活動を充実するとある。ここでは「なお、児童・生徒の読む図書については、人間形成のため幅広く、偏りがないように配慮して選定すること」と書き加えられているのであるが、この注文中に頭を抱えてしまう指導者も多いのではないだろうか。読書というものはそもそも読み手の生活環境や置かれた立場によつて偏るもので、果たして人間形成のため幅広く、偏りがなく本というのはどういうものか。戦争や原爆にまつわるテクストを扱かう際に自らが与える図書は本当に偏っていないのか。生徒自身に主体的な学びとして本の選定を行わせたとしてもこの課題は残るだろう。

そこで頼りになるのが教科書に掲載される教材や読書リストであるが、中学校用教科書は全国の生徒に渡り教室で扱われるという性質から全ての生徒が読めるように配慮され「子どもを誰ひとり取り残さない」進化を遂げてきている。その「進化」の中で、削ぎ

落とされてきたものはないか。教授者はその易しさの中にある危険性についても絶えず問い直しを行う必要があるであろう。

注

- 1 戦後検定教科書が導入された頃に教科書懇話会世話人であった水谷三郎の回想によれば、検定がはじめての試みであった一九四九年度用教科書の準備には困難が予測され検定初年度にあたる一九四八年度には臨時措置がとられた。(水谷三郎『教科書懇話会の歴史』一九六一年三月二十日、教科書懇話会清算人、四十頁)
- 2 吉田裕久によれば、一九四八年二月三日の文部省による検定公開の公式発表から原稿受付まで四ヶ月余りで原稿締結切が五月三十一日までに提出された企画届は六〇〇点を超えたという。その中で検定国語教科書として教科書目録に掲載された中学校用国語教科書は三種七冊(文法を含む)という結果であった。(吉田裕久「戦後初期検定国語教科書の研究」(広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部第六六一号、二〇二二、九六頁)
- 3 石塚修・金子哲「義務教育教科書に関する教師の意識及び保護者の要望についての調査 調査結果報告書(最終報告)(要旨)」(二〇〇八年九月二十日、財団法人教科書研究センター)は「義務教育教科書に関する教師の意識及び保護者の要望についての調査」では(ふだんの授業での教科書の使い方)について教科書以外の教材を使う比率は四教科(国語・社会・算数・理科)の中で国語が最も少なく、国語の授業における教科書が果たす役割の大きさと教科書中心に授業を組み立てていくことが国語の特性であると指摘している。
- 4 今野俊宏「いつものように新聞が届いた——メディアと東日本大震災」(東京書籍『新しい国語3』)、山村武彦「みんなでいるから大丈夫」の怖さ」(三省堂『現代の国語1』)など。
5 〈読書への招待〉という項目で前に高村光太郎「レモン哀歌」、後続に森鷗外「最後の一句」とともに配置されている。
- 6 「『黒い雨』に関して」(一九八二年筑摩書房『国語1』教師用指導書『学習指導の研究』)
- 7 中野和典「『黒い雨』論争」(『原爆』を読む文化事典)二〇一七年、青弓社、五十頁)
- 8 今村彰「平和教育運動—日教組のとらぐみ」(『教育評論』一九七九年八月号、二十六頁)
- 9 松本修「インタビューから見た一教師にとつての国語教科書史」(『初等中等教育の国語科の教科書及び補助教材の内容構成に関する総合的、比較教育的研究—学力の基礎をなす言語能力の形成を中心として—』、二〇〇六年度〜二〇〇七年度科学研究費補助金(基盤研究B)課題番号1830196 研究成果報告書 一〇四—一二頁(二〇〇八年三月))による一教師のインタビューでは平成四年度の教科書から教科書教材が急激に「軽く」なったという話があがっている。特に国語科ではA5版からB5版への変更当時から現場のとまどいや大きな疑問が投げかけられたというが、現行の国語科教科書が全てB5版で発行されている事実が示すように、義務教育学校用の教科書が元のA5版に戻ることはほばないだろう。
- 10 東京書籍「改訂 新しい国語」総説 (『改訂 新しい国語1』教師用指導書、十四頁)
- 11 「戦争と平和を思う」は教科書のための「書き下ろし」と指導書にあるが、「読売新聞」一九九四年七月八日夕刊付の原型があり、『林

京子全集第八巻』（日本図書センター 現代資料出版事業部、二〇〇五年）にも収められている。

12 「戦争と平和を思う」は早くも二〇〇二年の教科書には掲載されず、生徒の目に触れない教師用指導書資料編に移る。

13 川口隆行は『原爆文学という問題領域』（創言社、二〇〇八年）の中で「怒れる大田洋子」は、その激しい身振りゆえに、「原爆乙女」という紋切り型の記憶に押し隠された暴力の起源を想起させ、他者に記憶の分有を執拗に迫るものともいえる。だとすれば、慎みがない、はしたない女性として大田——とその作品——は忌避されたのではないか、といった推測も充分成り立つとしている。大江健三郎が、江藤淳が「黒い雨」を評した際に使用した「平常心」という語彙を逆利用して「夏の花」を擁護した地点で、原民喜と大田洋子の明暗が決定されていたのかもしれないという指摘は今もなお国語科教科書に掲載される「教材」の問題を突いていると言えるだろう。

14 一九八四版東京書籍「新しい国語」教師用指導書の総説では「文学を学ぶということは作者が想像の力を借りて表現した情緒を味わい、人間の生き方を学ぶことである。人間いかに生きるか、感動とともに読者に迫る作品を各学年とも入れるようにする。」と国語教科書にとって文学が大きな位置を担うことが示されている。

15 林京子「友よ」の教材価値（一九八七年 教育出版「新訂 中学国語2」、教師用指導書 指導編 下、二十九頁）

16 梯久美子は一九六一年、熊本県熊本市に生まれたノンフィクション作家である。高校時代からサンリオ社の雑誌で漫画家やなせたかしが編集長を務める「詩とメルヘン」に詩を投稿、大学卒業後に企業勤務を経てから編集者となる。雑誌や書籍の編集に携わる一方で、政治家、

企業家、文化人など多くのインタビュー記事を執筆した。三十九歳から文筆業に専念し、雑誌「アエラ」などにルポルターージュを執筆。二〇〇五年に単行本デビュー作『散るぞ悲しき硫黄島総司令官・栗林忠道』（新潮社）で第三十七回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞している。「薔薇のボタン」は先に高校一年生用教科書に掲載され、今改訂で中学校用の教材となった。

17 石川巧・川口隆行編『戦争を（読む）』第13章 原爆―林京子「空罐」（二〇一三年、ひつじ書房、二二二頁）

18 「どうする？ どうなる？ これからの「国語」教育」（二〇一九年八月、幻戯書房 二十四頁）